

〔「聖域の美」展によせて〕

時をこえた寺社巡りへのお誘い

本展覧会では、中世の作品を中心に、寺社境内の風景を描いた絵画を集めました。境内という空間がもつ静かな魅力は、宗教や文化のちがいが、そして信仰の深さの違いにかかわらず、人の心を捉えるものです。外国人観光客が「深い日本体験(ディープジャパン)」を求めて、僻遠の地にある寺社へ足を伸ばすようになったという話や、パワースポットとして知られるようになった、神社の奥の巨岩を見に来る若い人たちが増えたという話も聞きます。

じつさに、この展覧会の企画を考え始めた2018年の1月に、日経新聞が掲載した「なんでもランキン

外国人がゆく「ディープジャパン」(1月27日「日経プラス1」)で堂々トップに選ばれたのが「高野山奥之院」でした。奥之院とは、広い高野山の最奥、弘法大師が今も静かに約束されている時がくるまで眠っていらっしゃると信じられている御廟がある場所で、その一帯は卒塔婆と五輪塔で埋め尽くされている墓域です。

また、同じ頃、2018年新年号として発刊された雑誌「&Premium(アンドプレミアム)」(マガジンハウス)の表紙は、霧にかすむ広島市街を背景にした、厳島神社の赤い鳥居の写真で、「心を鎮める、美しい聖地へ。」というコピーが黒々とした端正な明朝体で印刷されていました。

内容は、「参拝の基本」、「境内

のつくりを知る」、といった基礎知識のおしゃれなイラスト付き解説、寺社とその境内の美しい写真をたっぷり使った各地の聖地紹介、そして「16人の私の好きな神社、お寺」など。30〜40歳代の女性を対象にした雑誌のようですが、寺社という場に興味を持ち始めた人々にはうってつけのガイドブックでした。

そして、この雑誌を閉じたときに、私が見たいのは、現在の寺社境内に至る長い長い歴史のなかの境内の姿、聖域の面影なのだと、あらためて思ったのです。それを知ったうえで、寺社を訪れたなら、そこにつまり重なる過去の人々の祈りや出来事の重みまで、感じることできるかもしれません。

そんな思いで、この展覧会では、さまざまな時代背景のなかで生まれた、寺社境内の景観を捉えた絵画をご紹介します。カメラなどなかった時代、絵画は、眼前の風景を目に見える形で保存する唯一の手段でした。それゆえに、そこには寺社へ寄せる人々の深い思いが込められ、描かれた風景はじつに多様で多彩、そして味わい深いものとなります。

京都・奈良の寺社に加え、北は会津磐梯山の麓の慧日寺から南は久留米の玉垂宮まで、各地の聖域を描く鎌倉時代と室町時代の作品を中心に、34件の絵画を展示いたします。そして、おしゃれなイラスト付

き解説のかわりに、手作り感あふれる自作の描き起こし説明図を会場と展覧会カタログに用意しました。

見どころのひとつは、「ディープジャパン」第1位に輝いた高野山、とくに奥之院を印象的に描いた絵画を4件そろえたことです。

1300年代の前半(時代でいうと鎌倉時代〜南北朝時代にかけてのころ)に描かれたと考えられる重要文化財「高野山水屏風」(京都国立博物館蔵)〔図1〕、室町時代の「高野山曼荼羅」(東京藝術大学蔵)と「かるかや」(サントリー美術館蔵)〔図2〕、そして江戸時代の「高野山図屏風」(堺市博物館蔵)〔図3〕の4件です。細緻に描かれた「高野山水屏風」は、高野山全体を大きく捉えている絵画ですが、じっと見ていると絵のなかの小さなモチーフ、境内を歩く人々や犬や鹿、木立から上半身(前半身か?)だけのぞいている猪など、微細なモチーフが見えてきて、絵の中の世界の奥へ奥へと引き込まれます。本展のポスターや展覧会カタログの表紙などにこの屏風絵の一部を使わせていただいています。

それに対して、「かるかや」は高野山を主な舞台として、哀しい家族の物語が展開する絵本なのですが、そこに描かれた高野山は、高野山へ行けない人が話だけ聞いて想像して描いたのではないかと思います。高野山の風景というよりも、高野山の印象、あるいは高野山の幻影が、筆を激しくうちつけるようにして描かれ、上手ではないけれども、心をうつ強さがある絵な

のです。そのほかの2点も、それぞれの時代性を反映し、みごたえのある高野山の風景を楽しむことができます。

また、本展では、あまり絵画の展覧会には登場することのない、室町時代の絵図を集めました。郷土の歴史資料として扱われている絵図のなかには、中世の風景画として見ごたえのあるものが少なくありません。

新幹線の車窓からみえる滋賀県野洲市の三上山とその麓の御上神社を描いた「三上古跡図」(御上神社蔵)〔図4〕や、北摂を描いた「摂州細川荘絵図」(池田歴史民俗資料館蔵)、そして会津の「慧日寺絵図」(慧日寺蔵)など、どれも、その地方の絵師が描いたのだらうと思われるものですが、それだけに、寺社に寄せるあたたかな気持ちがいこもり、のどかで朴訥な味わいの風景画になっています。

今回展示した絵画に描かれた寺社の多くは今も存続しており、そこを訪れることができます。まずは展覧会で絵のなかを歩いていただき、そして、それから現地へ足を運んでいただければ、きっと、あ、ここにはあの絵の雰囲気がまだ残っている、と気づかれるようなこともあるはずです。

ぜひ、秋の1日、当館で時空を超えた寺社巡りをお楽しみください。(泉万里)

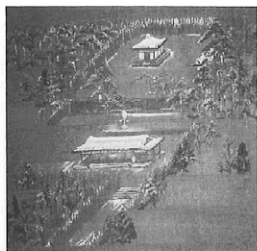


図1 高野山水屏風(奥之院部分)
京都国立博物館



図2 かるかや(奥之院部分)
サントリー美術館



図3 高野山図屏風(奥之院部分)
堺市博物館



図4 三上古跡図(御上神社部分)
御上神社蔵

季刊 美のたより No.208

令和元年 10月 2日

発行 大和文華館